

学 位 論 文 題 名

宋明時代における論語解釈史の研究

学位論文内容の要旨

本論文は、松川氏が、個々の思想家ごとの著作に見える思想を中心に個別に研究するという、従来の研究方法以外に、朱子学や陽明学の思想的特質を解明する上で有効な方法はないものか、という問題意識の下に、各思想家が古典解釈にことよせて自己の思想を表明していることに着目し、『論語』の主要な各章の解釈史の解明に取り組んだ成果である。

本書の構成は目次に示されているように、天道、天命、道体、性命、心、仁義など中国哲学の基本的術語に関わる二十一章について、それぞれ解釈の歴史的変遷を跡づけている。本論文の内容は多岐に渡り、内容全体を具体的に紹介する余裕はないが、序章の手法が全章に渡って踏襲されていることに鑑み、本報告では、序章のみ具体的に紹介し、他の章については特徴的な点のみ紹介するに止めたい。

さて、序章では、公冶長篇第十二章の「夫子の、性と天道を言ふは、得て聞くべからず」を取り上げている。この章は、南宋の朱子の解釈、『四書集注』に拠って、孔子は性と天道についてはめったに語らず、学ぶ者は聞くことができなかったが、弟子の子貢がはじめて聞くことができて賛嘆した言葉である、と解釈するのが通例である。

松川氏は、まず、近年出土の敦煌本、鄭玄の『論語注』を取り上げ、鄭玄が『春秋』に拠って「性」について、賢愚のみならず吉凶を含む概念として解釈したこと、「天道」を日月五星の変動の占いと解釈し、性も天道も人力ではいかんともしがたい不可知の要素があるという意味に解釈していたことを示している。ついで、孔子の権威が絶対化されるにともない、魏の何晏の『論語集解』では、孔子が性と天道について熟知していたが、凡人にはその深遠さが理解できないと解釈したこと、梁の皇侃の『論語義疏』では、孔子の天賦の性分は宇宙の法則、天道と一致しているので、常人には理解できないと解釈したことが示されている。ついで、唐の韓愈、李翱の『論語筆解』では、孔子の性と天道が一致しており、弟子の子貢がよく理解した、と解釈を一転したこと、そして通例の解釈として、子貢が孔子の言葉を聞き得た喜びを表明した言葉と解釈する北宋の二程子『程氏遺書』、張載の『張子語録』、朱子の『論語精義』『論語或問』『論語集注』『朱子語類』の解釈をあげて分析している。さらに、これと宋代の心学の系統の解釈を対置し、張九成『論語百詩』、陸九淵『陸象山全集』などを例として、孔子は性と天道について以心伝心で授けたので、資質の低い弟子は言外の意を悟ることができなかったという解釈を示している。この他に、明代心学の解釈例として、王陽明の高弟、王畿『王龍溪語録』、明末の儒仏道三教一致論者、林兆恩『四書標摘正義』を挙げ、また、王陽明の論敵で、気の哲学の系譜に属する羅欽順『困知記』、清朝の考証学者、顧炎武『日知録』、戴震『孟子字義疏証』、劉宝楠『論語正義』などに見える解釈をも提示している。松川氏は、このように歴代の解釈

の多様性と変遷を思想史的展開として具体的に跡づけている。この通時的分析の手法は、以下の第一章から第二十章まで一貫して採用されている。

第一章では、歴代の解釈に見える天道観、第二章では、道体に関する子罕篇の「逝く者はかくの如きか、昼夜を舍かず」章の解釈史を辿り、第三章では天命観、第四章では、陽貨篇の「性相近きなり、習へば相遠きなり」章の解釈を取り上げ、歴代の性説の展開を跡づけている。第五章では為政篇の「心の欲する所に従って矩を踰えず」章の解釈に触れ、陽明が「心をほしいままにする」と読んだこと、第六章では子罕篇の「意毋し」の句について、無欲、無作為とする解釈、朱子学における私意が無いとする説、心学の「意念を起こさない」とする説などを跡づけている。第七章では、徳目の孝悌と仁の関係について、第八章では、顔淵篇の「克己復礼、仁と為す」章の解釈史を跡づけ、朱子学では「己にかつ」と読み、悪しき私欲にうち勝つ意に解釈したのに対して、心学系の思想家は己を肯定的に捉えて、「己をよくす」と読み、自己の能力を発揮する意に解釈した事例などが豊富に引証されている。第九章では仁者の好悪について、憎悪を超克すると解釈した心学の例があること、第十章では、実践道徳としての恕について、第十一章では子罕篇の「子まれに利を言ふ、命とともにし、仁とともにす」章の解釈の変遷を辿り、利にはプラスの方向の意味と利欲といったマイナスの方向の意味とがあり、反功利主義的な朱子学において、実は利を必ずしも軽視していないこと、清の考証学者、黄式三が「罕」を「あらはす」と読んで、従来の解釈の矛盾を解決した事例などが示されている。

第十二章では、貧賤に安住する思想、第十三章では、里仁篇の「朝に道を聞かば、夕べに死すとも可なり」章を取り上げている。里仁篇のこの句は、一般に、死んでもよいほどの道への渴望を比喻する句として知られているが、実は、朱子学では、道を聞いたら生きている時は為すべき仕事をなすことができるし、死ぬときには安らかな心境で死ぬ、という意味に解釈していた事実を示し、明代の心学では、安らかな心で死に対処できるという意味に限定して解釈していた事実を示し、死んでもいいという解釈が一般的解釈ではないということを検証している。ついで、第十四章では死生観について、第十五章では学問観を取り上げ、第十六章、第十七章では、『論語』に見える「知」について、陽明学では「良知」と解釈している事例を検討し、第十八章では孔子の弟子の評価を巡る諸説をあげ、第十九章では為政篇の「異端を攻む」という句について、楊朱・墨翟や諸子百家、ひいては仏教を排斥する意と解する例を挙げたのち、陸象山が異端を煩雑困難な学問方法と解釈したこと、王陽明が禅を異端とせず、一般庶民と異なるもの、良知と異なるものを異端としたことなどが論述されている。第二十章では、里仁篇の「吾が道、一以て貫く」章について、朱子学では一を理と解釈し、陽明学では一を心とし、わが心の良知を行為として実現する意に解釈していたことなどが示されている。本論文は、主として宋明の人士の思索の様態を探ることに重点を置いているが、その特徴を浮き彫りにするために、漢代から清代、及び江戸時代の解釈についても、通時的に分析を加えている。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 伊 東 倫 厚
副 査 教 授 佐 藤 鍊太郎
副 査 教 授 石 塚 晴 通
副 査 教 授 津 田 芳 郎

学 位 論 文 題 名

宋明時代における論語解釈史の研究

中国近世の思想状況を研究対象とした論文としては、楠本正繼『宋明時代儒学思想の研究』以来、思想家達が身を置いた時代の特徴や地域性を考慮しつつ、彼らの思索の跡を思想史として構成しようという試みがなされてきたが、本論文もそれらの従来の研究成果を踏まえて執筆されている。

本論文は、『論語』に関する膨大な文献資料に基づいて、漢代から清代にかけての約二千年間、及び江戸時代に展開された『論語』解釈の事例に即して、様々な解釈がなされてきた哲学・思想のキーワードに関わる章を中心に提起して、その解釈の思想的背景及び諸解釈間の影響、受容、反発の様相を丁寧に跡づけた労作である。

歴代の『論語』注釈を集大成した『論語集成』はもとより、各時代を代表する『論語』に関わる解釈を採取し、特色のある解釈であれば、従来、『論語』の研究者が取り上げる余裕のなかった一見零細な資料についても、丁寧に提起しており、『論語』の注釈書だけでも、実に二百種に及ぶ資料を渉猟し丹念に整理している。

また、従来の『論語』の訳注には、古注と新注との思想的背景の差異や歴史性を無視し、恣意的に古注と新注や我国の学者の注釈などを取捨した解釈が多く見られるが、本論文は、そのような訳注の妥当性を判定する上でも、試金石となる業績である。

長い年月に亘る研究の集大成であるためか、本論文には、記述上の不統一や、列挙した資料についての説明の省略などが若干存し、近世の難解な口語文献について書き下し文のみ示して現代語訳を示していないといった、やや不親切とも思われる記述もまま見受けられる。望蜀の言を呈すれば、読者の理解を助けるために、もう少し平易で丁寧な説明が必要な箇所が見受けられぬわけでもない。

また、今後の課題として、本論文では取り上げられていない思想史上重要なキーワード、例えば君子と小人、中華と夷狄など、検証すべき術語の存在を指摘することも可能ではある。

以上のような瑕疵は認められるが、中国においても日本においても、これほど広汎な資料を縦横に駆使し、『論語』の解釈の変遷、及びそこに見られる思想的特色について精密に検証した研究は、これまでのところ見あたらない。

『論語』解釈の歴史的変遷を提示した本論文は、士大夫の思想・学説が、そのまま彼らの『論語』解釈に反映されている実態を浮き彫りにして、『論語』の解釈の多様性が中国思想史の展開と密接な関係にあることを如実に検証しており、中国の近世思想史の研究に寄与する業績として高く評価することができる。

本審査委員会は、提出された申請論文について慎重に審査し、また、口頭試問を実施して審議した結果、以上に述べたような高い評価に鑑み、全員一致で松川健二氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。